

【ねがいましては】

令和2年1月25日

KYOWA SCHOOL

第351号

「語彙」

前回、「よい子1」として、今回は「よい子2」のはずでしたが、昨年、OECDより衝撃的な結果が出てしまいました。というわけで、今回はそちらの情報から、「やはりそうだったか」という内容です。

OECDの結果は、「国際学習到達度調査(PISA)」の結果です。読解力がガクンと低下してしまったことです。この調査は3年ごとに行われ、毎回、子どもたちの学力のあり方が大きく取り上げられています。なぜ、OECD(経済協力開発機構)が、このような調査を行うのか。それは、子どもたちの学力を調べることで、その国の将来のあり方を予想するためだといえます。つまり、しっかりとした学力を構築している国は、将来経済的発展が大きく見込まれるということだそうです。頭のいい子が多くいれば、発展に寄与する度合いも大きいということなのでしょう。

経済発展と子の学力を結びつけることに、私は大きな憤りを感じます。なぜなら「真の学び」を土台にした場合、どうしても競争原理を教育の中に取り入れることが私には許容できないからです。詳細については、またの折に書かせて戴きたいと思います。

で、この読解力・・・裾野を広げると、人と人とのコミュニケーション能力などに大きく影響することが考えられます。相手の言っていることを誤解して受け取ってしまう。文章を間違っ理解してしまい大きなミスをする。などなど、現実社会の中での活動に大きなダメージを与えてしまうことも考えられます。大切な人と人との信頼関係に大きな影響が出てしまう危険があります。

現代の子ども、若者たちがどのような語彙の使い方をしているか、少し取り上げてみます。

『この公園には滑り台をする』『「違った」を「違かった」という』『「きれい」の否定形を「きれいくない」という』などなど、その道の専門家の方々が開いた口がふさがらないそうです。

さて次に、ではなぜそこまで読解力が劇的に低下してしまったのか、数字で表してみます。まず、中校生のスマホ保有率が、日本は83.8%、ラインなどの「チャット」を使う率においては、7年前の約2倍にまで増加しています。それと反比例して、読解力が低下しているそうです。何もかも「短文」で処理してしまう習慣が長文を読み解く力を低下させ、さらには言葉の表現力についても同様に低下した・・・。また、スマホを見ての会話がなくなったことで、相手の目を見ながら感情を伝える能力も低下したそうです。伝えることは、ラインで済んでしまうため、メールを送ることも少なくなったそうです。そのため、一度打ったメールを何度も読み直し、推敲して相手に送るなどの行為も少なくなったそうです。

反面、小説や伝記、ルポルタージュ、新聞まで幅広く読んでいる生徒は、読解力の得点が高かったそうです。常に活字に触れている環境が大切だということが分かります。この子たちはスマホを所有しながらも、上手に活字に触れています。ではスマホ以外に活字離れを助長する要因とは・・・ゲームもそのひとつかもしれません。そして放課後のあり方・・・。ゲームをしている間は活字とは無縁の時間帯です。そして放課後、今は放課後という言葉が徐々に死語になってきている感があります。なぜなら子どもたちの過半数は、放課後、「部活動」という時間の過ごし方が多くなっています。活字と縁のある部活動はなかなかお目にかかることができません。「読書部」はあるのでしょうか。「新聞部」はあるのでしょうか。少なくとも、小・中学校では見つけることは至難ではないのでしょうか。

学校現場では、旧態依然的に漢字の書き取りテスト、読み取りテスト・・・実はこれが語彙の意味を理解していない要因のひとつになっています。書ければ得点、読めれば得点です。この得点主義は、子どもたちに大きな誤解を与えがちになります。漢字が書けていれば点がもらえますから、その漢字を使いこなすことは無用になります。自分の中から湧き出してくる感情を、その漢字を使って上手に表現する・・・。漢字が読めて得点を得たとしても、同様なことが言えます。漢字テストで高得点をとってきても、本人はそれを使いこなすことができない。そして、その得点を見たご両親はひとつの大きな誤解を吸収します。「うちの子は言葉が使える」・・・。実は分かっていないことが多くあります。

明日は漢字テストがあるので、同じ漢字ばかりを何度も書いて練習する子がいます。学校でも「〇〇回、書いてきなさい」という宿題が多く見られます。結果、親はだまされることになります。子が親をだましたわけではなく、テスト結果(得点)が、親をだましています。ですから、漢字テストという具体物には十分な配慮が必要になります。これはテスト全般に言えることだと思います。テスト中の選択問題が、すべてまぐれ当たりであったなら・・・。

我が子が自宅で食い入るように「本」に目をやっている光景・・・。そしてその瞳から一粒の涙が・・・。そんな本との出会い・・・。子が食い入るように新聞に向かっている。そして次の瞬間、「お母さん、なぜグレタさんは17歳でありながら、あのような活動ができるの・・・。私、グレタさんのこと、もっと知りたい・・・。」なんて問われたら、それが真の学びの瞬間ではないのでしょうか。テストで何点などどうでもよい瞬間です。

そんなお子さんの「生きよう、なんとしてでも精一杯に生きてやるぞ」という瞬間のために、私は子に寄り添うことをしてあげたい。それはしっかり「子の心の鳴き声」を聞いてあげることだと思います。